
名探偵の終着路 ~重なったanother~

真知歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵の終着路 〈重なったanother〉

【Nコード】

N8851X

【作者名】

真知歌

【あらすじ】

『闇に放つ銀の弾丸』^{シルバー・ブレット} 続編：虹を掛ける愛の矢』^{キユービッド}に続く最終編！
黒の組織を完全に破滅に導き、遂に待ちに待った新一と蘭の結婚式、幸せいつぱいの結婚式のはずが… 突如現れる謎の人物！？CIA 諜報員として活躍する探偵団は必死に守ろうとする…。その時反射的に灰原（宮野志保）を守った新一… 「ねえ…どうして新一…？」

関東で起きる連続殺人事件の容疑者…またあの男が帰ってくる…！？

結婚式に乱入し式を中断させた人物とは!?

そして再び現れる江戸川コナン…

彼は一体なぜ…!?

「私はあなたを幼児化させた薬の開発者よ?」

「時の流れに逆らえば人は罰を受ける… 工藤くん…残念ながら恋愛も同じよ?」

窮地に立たされたコナンが下した決意とは…!?!?本音とは…!?!?

コ哀派感動のストーリー、最終編

「新一、好きだよ…」

「工藤くん…好きよ?」

お見逃しなく!!!

祝福の珍事（前書き）

江戸川コナンから工藤新一に戻り

一年が経った春…

二人はチャペルで結婚式を挙げていた

祝福の珍事

パパパパーンッ
パパパパーンッ

扉の向こうには新婦、蘭が小五郎と腕を組み立っている
それを前で待つ新一

有希子「新ちゃん、おめでと〜」

光彦「おめでと〜ございます!!」

灰原「なかなか似合うわね?そのタキシード」

色々と皆から言われ照れ臭そうにする新一

扉の向こうから小五郎と来るであろう蘭、それを待ち扉に目を向けると側にいた目暮警部が目に入った

もちろん知人の息子として警察の協力者として参加しに来てくれているのだろう…

そう思う新一…

その隣には佐藤刑事と高木刑事もいた

新一（ん?どうしたんだろう…）

だが警部達の目付きはとても祝福の場とはかけ離れ、いつもの犯人を捕まえようとしている刑事の目付きだった

不思議に思う新一、目の前の扉が開き蘭と小五郎が歩いてくる

英理「おめでと〜、蘭」

蘭「ありがとう!」

歩美「蘭お姉さん、とっても綺麗!!」

蘭「そうかな…?ありがとう!」

新一も蘭のウエディングドレス姿に惚れ惚れとしている

すると視線を感じた新一はその視線を発している者の方を見る

新一「なんだよ…!」

灰原「探偵さんもそんな顔をする時があるのね?」

蘭に見とれていた新一をからかうように言う

新一「うるせっ!」

顔を赤くしながら小声で灰原に言う

すると照れ隠しからなのかいつもものくせでスボンのポケットに手を入れる

……すると次の瞬間!

バーンッ…

一発の銃声がチャペル内を沈黙にさせた

狙われた名探偵

銃声を響かせたのは佐藤刑事だった

佐藤刑事の撃った弾は新一の足元のタイルに埋め込まれた

新一をはじめ周りの人物達は銃声は勿論、その放った弾は新一を狙っていたことに驚く

そしてもう一つ、銃声を聞いた新一はとっさに庇うように灰原を抱き締めていた

灰原「あなた何してるの？」

新一「あ？ああ…！わりい…」

「また組織の残骸が現れたんじゃないかねーかと思って…」

蘭

有希子（あら、新ちゃんったら…）

皆がその新一の行動に啞然としていた

灰原「佐藤刑事どうしたのかしら？」

蘭の視線が痛く新一から離れる

新一「ああ…」

警部達は結婚式に来ていた人達を帰宅へと促し目暮警部と佐藤刑事が新一に歩み寄る

小五郎「警部、一体…」

通り過ぎる目暮を見て言う

目暮警部と佐藤刑事は新一の目の前で止まり曇った表情で

佐藤「工藤君…君を関東連続殺人事件の容疑で逮捕する」

と言い渡す

当然その言葉に驚きを隠せない一同……
もちろん新一本人も

優作「目暮警部、事情をお聞かせ願えますか？」
冷静な優作は目暮警部に事の経緯を訪ねた

目暮「ああ……実は……」

容疑者の諸事情

するとここ五日間、東京を中心に四件の殺人事件が発生していることが分かった

被害者は皆20歳前後の女性で髪は黒の長髪で清楚な女性…

そして事件現場には犯人の痕跡が全くなく凶器すら見つかっていなかった

博士「しかし何も新一を疑わなくても…」

歩美「そうだよ！もし新一お兄ちゃんが犯人だったら…確かに事件現場に痕跡も残さないと思うし黒のロングヘアで清楚な蘭お姉さんが好きだけど… そんなことはしないもん！！」

おにいちゃん、フオローにほなつてねえよ…
新一

服部「なあ、警部はん？」

「まさか工藤が犯人だと言えるような証拠みたいなもん見つけはったんやろか？」

新一

同じ事を思っていた新一は真剣な表情で目暮警部を見た

目暮「今回の事件の指揮を取っているのは上層部でわしらの意見などともに聞いてもらえなかった…」

「工藤君には日頃から世話になってるし、勿論優作君とは知人で工藤君が殺人犯を突き止める事はあっても殺人犯になるような人間でない事は充分承知していた…」

蘭「ならどうして新一が…」

そう、新一本人も信賴している警部達が間違っても自分を犯人だと

疑うことがあるはずはないと思っていた
だが今日の警部達は何かが違かった

佐藤「見つかってしまったのよ……」

灰原「何が？」

高木「殺人現場の監視カメラに映る工藤君の姿が……」

本人以外は当然驚いている

蘇る偽りの魔

有希子（まさか…新ちゃん…）

優作「そんなはずないだろう？」

元太「おい、新一どうなんだよ!？」

快斗「とうとうやつちまったか?名探偵…」

そんな言葉に最早呆れている新一

新一「何かの見間違いだろ？」

横目で見ながら流すように言う

目暮「いや、それが…」

「その監視カメラに映る君の近くにあっただ…」

「君の車が…」

新一に戻り18歳になった新一はここ半年で車の免許を取り愛車を所持していた

佐藤「ナンバーも工藤君の車に間違いはないわ…」

一同はまた絶句していた

服部「工藤、何かの間違いやろ？」

光彦「新一さん!なんとか言ってください!…」

博士「し…新一?」

蘭「ねえ、新一!何かあるなら黙ってないでちゃんと話して!…」

そう、新一は黙り込んでいた

だが真相を話され追い詰められてしまったからではなく今、新一の

頭の中には恐ろしい事が浮かんでいた

工藤新一と同じ顔や容姿、瓜二つに真似をし復讐のために工藤新一として犯罪を犯し本人を追い詰めるというこの手口…
前にもどこかで…

新一「警部、それは僕ではありません」

「残念ながら犯行時刻のアリバイや証人はいませんが警部達や上層部の人間が納得できるようなお話をさせて頂きたいと思います」

そう言うと一同は真剣な眼差しで新一の方を向く

再び迫る虚像

そして新一はあの事件を話した…

そう、『工藤新一』を恨み新一と同じ顔にし犯罪を犯したあの“屋田誠人”という人物の存在を

この状況から新一にまだ恨みを持ち新一の犯行に見せかけて事件を起こしているというのは一目瞭然だった…

被害者の黒髪のロングヘアという蘭にそっくりな像もまた警察の目を工藤新一に向けさせるためにやっているのかもしれない…
ということを皆の前で話した

服部「おいおい、まさかまだお前に恨み持つとるんか!？」

蘭「そんな…」

目暮「そんな事があったのか…」

「でもよかった、工藤君が犯人じゃなくて…」

光彦「当たり前です!！」

高木「やつぱり?まさか工藤君が!?!とは思っていたんだけど上からの指示があつたとなると僕らの力じゃ止める事ができなくて…」

佐藤「ええ、そうね」

「そうゆうことなら上に話してその屋田誠人という人物を指名手配するわ?」

優作「お願いします。」

目暮「今日は悪かった…」

「こんな大事な時に…本当にすまない」

有希子「いえ!また拳げればいいのよ、ね?」

と新一と蘭に笑い掛ける

晴れない心

新一

とても複雑な気持ちを顔に現わす

蘭「そうですね……」

結婚式は中断になってしまったけど新一の疑いが晴れたならと少し安心したような顔で有希子に返す

警部達は皆に詫びを入れ真犯人逮捕に努めるため素早くその場を退散した

その後残された一同はこの空気ですべてを続けるのも無理があったため今日は引き上げてまた後日やり直そうという事になった

そして新一と蘭と灰原と探偵団の三人、服部に和葉に園子は一旦博士の家に行く事になった

有希子と優作、英理に小五郎、快斗は他に用事があるためその場で皆とは別れた

快斗「じゃあな名探偵！」

新一「おう、悪かったな快斗！」

そういうと新一達は阿笠邸へと向かった

博士の車の中では皆がほとんど無言だった

新一を始め服部や蘭や灰原に探偵団の三人、和葉やあの園子でさえ
無言で今回の事件のことを考えていた

そして蘭と灰原の脳裏にはもう一つ、

あの時の新一の行動が頭から離れないでいた

晴れない心（後書き）

蘭（なんで新一はあの時…）

（いくら哀ちゃんを狙われていたっていつても…）

（新一なら私の所に来てくれると思ったのに…）

（ねえ、新一…本当に私で良かったの…？）

灰原（工藤君、あなたのあの行動でどれだけの人が傷ついたり不安
がったりしているかあなたには分からないでしょうね…）

（少なくとも、私は迷惑よ…）

（一度決めて進み始めた道に障害物を置かないでほしいわね…）

過酷な談話（前書き）

その頃

林の茂る小屋の中では

あの男が不気味な笑みを漏らし
片手に怪しげな袋を抱えていた

過酷な談話

阿笠邸に着いた一同はソファーに腰をかける

新一は博士に関東連続殺人の詳しい概要を調べるように頼んだ

蘭「新一、これからどうするの？」

新一の性格を知る蘭は新一が今回の事件をこのままにしておくはずがないと分かっていた

新一「ああ、屋田誠人はきつと何らかの理由で俺に恨みがあり今回の犯行を起こした……」

服部「恨みってまだ工藤のこと恨んどるんか？せやかてなんでまた今更……」

新一「いや、前回の事は解決している……」

灰原「ならどうして工藤君を……？」

新一「前の事をまだ恨んでいるのは考えにくい……となると恐らく……」
服部「ま……まさか!？」

新一「ああ、また生まれただらうぜ？」
「俺を恨まなければやっていけないようなことが……」

園子「でもまだその屋田って人の仕業かどうかなんて分からないんじゃないの？」

灰原「そうね……？」

新一「いや、この俺を追い詰めるようなやり方……あいつに間違いない……」

「俺の車の車種やナンバーを知っていたとなると多分、俺の近くにいたことも間違いない……」

和葉「うっそ〜!?!怖いわ〜」

新一「くそっ…一体何の恨みがあるんだ…」

この状況からもしかすると蘭にまで危害が及ぶのではないかと危険を感じ新一は一刻も早く犯人を捕まえなければいけない苛立ちに侵されていた

悪魔の境界線

翌日

新一は博士に頼み東奥穂村まで訪れた
助手席に座る新一の手には昨日博士が調べた資料があった

新一は止めたが心配な蘭は二度と新一と離れたくないと思い共に東
奥穂村へ訪れた

灰原「恨みの種は組織関係かしら？」

後部座席に座る灰原が言う

その隣には歩美と光彦と元太もいた

新一「その可能性は高いな」

「組織の人間は仕事柄顔も広いし人員は何百人にも及ぶ…」

「屋田誠人が組織の人間の知人や友人だという事も考えられなくは
ない」

「灰原、気を付けるよ？」

灰原「ええ、分かってるけど…」

「あなた、気にする人を間違ってるのかしら…？」

そう言いながら蘭をチラ見する

すると新一は一瞬ここに蘭がいたのを忘れていたかのような顔をする

新一「もちろん蘭もだ」

蘭「うん、でも私は大丈夫…」

新一「屋田誠人が狙う被害者の容姿は蘭にそっくりだ…」

「俺の犯行に見せかけるためとはいえどうもひっかかる…」 蘭、油

断するなよ?」

蘭「うん、ありがと…」

(そうよね…? 私は空手もやってるし組織の人間に狙われていた訳でもないし…)

(それに比べたら哀ちゃんは子供の体だしもしまた組織の人間に係っていたとするとかなり危険な状況になり兼ねないものね…)
下を向きそう考える蘭

違和と消沈

確かに二人の身を心配する新一だが

その心配の仕方はどこか違った

それは蘭も灰原もなんとなく気にかけていた

灰原には“気を付ける”

蘭には“油断するな”

二人とも自分の能力や体力と同等位な者に対する発言だが“油断するな”という言葉は何処か無責任な言い方にも聞こえた

灰原「……………」

すると細い道の反対側からバスが来るのが見えた

博士の車は定員オーバーで乗れない服部と和葉は昨日同様バイクに股がっっていた

博士の車の横で東奥穂村に向かっている二人はバスが来たのを見て博士に『俺が前に出る』と合図した

博士は少しスピードを落とし服部に先頭を委ねる

博士の車とバスがすれ違う ……

新一（……………、 ……？、 ……！！）

「博士！止まって！！」

その言葉に博士は急ブレーキをかけた

それに気付いた服部のバイクも停車した

キキーンッ！！！！

服部「どないしたんや!？」
車から降りてくる新一に問い掛ける

新一「今、あのバスに屋田誠人が乗ってた…」

博士「!？」

服部「!？」

和葉「!？」

灰原「!？」

光彦「!？」

歩美「!？」

元太「!？」

蘭「私も見た…」

博士「本当かね!？」

蘭「うん、間違いない!あれは屋田誠人さんよ…」

（そう、新一みただけだけど新一じゃないこの変な感じ…間違いないわ）

新一「とにかく、向かおう…」

とバスと反対方向を見つめる新一

混乱する心

博士「屋田誠人を追わないのかね!？」

服部「せっかく見つけたんやから追わないでどないすんねん!？」

歩美「新一お兄さん、何か考えがあるの?」

新一(…!?)

一瞬コナンでいるような気がした

それもそのはず、歩美の今の発言はコナンに質問するかのようない方だった

歩美「あつごめんなさい…!」

「なんかコナン君みたいだったから…!」

驚く新一を見て慌ててそう言った

灰原「歩美ちゃんの言う通りよ?」

歩美「えっ?」

灰原「彼はかつて江戸川コナンだったわ?」

「姿や年齢は元に戻ってしまったけど中身は何も変わってないもの、だから江戸川コナンと接するような感覚でいいんじゃないかしら?」

光彦「そ…そうですね!？」

落ち込む様子の歩美を元気づける

灰原「そうよね?工藤君?」

新一「あ、ああ…!」

蘭「そうよ、歩美ちゃん!」

「新一はコナン君でコナン君は新一!」

「何も気にしなくていいのよ?」

歩美「蘭お姉さん…!」

その様子を横目で見る灰原…

理不尽な理屈

灰原（私が今言った意味ちゃんとか分かってているのかしら…？）

（江戸川コナンと工藤新一では確かに見た目は違うわ…）

（彼以外の人間が同じ状況に陥った場合、大抵の人間が元の姿と仮の姿とは同じ性格や喋り方のまま…）

（けど、工藤君…あなたは違ったわ）

（江戸川コナンという仮の姿であなたと出会い関わってきた）

（工藤新一という人間を知らなかった私は元の姿に戻ったあなたにかなり驚かされたわ？だってあまりにも江戸川コナンとは違う人間なんだもの…）

（でも、今のあなたは歩美ちゃんが間違えるくらい江戸川コナンに似て来ている…）

（それがどうゆうことか分かるかしら…？）

（それではダメよ…？工藤君…）

新一「屋田誠人がまだ何処へ向かっているのかも分からない状況だ…」

「そんな中ノコノコとついて行ってもし何かに巻き込まれでもしてみろ？」

「奴は俺になりきり四件もの殺人を軽々と起こし平気な顔をしている…しかも現場には奴の痕跡はなく現行犯でないと捕まえられない程だ…」

「考えたことはないが、もし俺が殺人を起こすとしたらきつと屋田誠人と同じような手口だろう…」

和葉「ってことは工藤君、蘭ちゃん殺すゆうことか！？そんなん許

さへんで!!!」

服部「アホう…そこやないで？」

呆れた顔で和葉に突っ込む

巧者の作戦

新一「じゃなくて、痕跡も残さないで殺人を四件も起こすということ…。」

「痕跡も何も残さず殺人を起こすというのはそんな簡単にできる」とじゃないし、いずれ何かしらバレてしまう…。」

服部「そやな？」

新一「なのに屋田誠人は完璧にやってみせた」

「まるで工藤新一が殺人を起こしたかのように…。」

「そこまで完璧に俺を勉強してる人間だ…。」

「何もなしで容易く近づく事は危険だ」

蘭「なるほど！屋田誠人の家に行けば何かしら…。」

新一「ああ、そうだ、何かしらの手掛かりがあるはずだ」

「目暮警部には昨日、内密に調査してほしいと言っておいたからまだ屋田誠人にはこの犯行が工藤新一によるもの、また工藤新一に偽った人間の犯行によるものという情報は入ってないはずだからな？」

灰原「だから屋田誠人は工藤新一本人が自分を調べに来ることは想定していない訳ね？それを解いて屋田誠人を捕獲する作戦を練るのね？」

新一「そうゆうことだ！！」

そう自信満々な笑みで言ってみせた

これが工藤新一最後の事件になるとは思いもせず…

巧者の作戦（後書き）

そして一同は東奥穂村の
屋田誠人宅に着いた

以前と変わらずそこは
不気味な小屋だった

一つ変わっていることと言えば
室内の雰囲気だった

以前のように恨みが
充満しているのではなく

何処か希望で充満する匂いがした

恐怖の丸印（前書き）

灰原「ねえ？これ何かしら？」

新一「何かの科学製品みてえだな？」

灰原「そんなこと分かってるわよ、私は科学者よ？何に使ったのかわかって聞いているの」

新一「ああ？んな事知るかよ」

灰原「あなた名探偵でしょ？」

新一「いくら探偵でも分からねえ事くらいあんだよ」
ムスっとした様子で応える新一……

灰原（…まさかね？）

恐怖の丸印

蘭「なんだろうこれ…?」

机の上に置いてある地図には赤い丸印が五つ書いてあった

新一「ちよつと見せて?」

地図を蘭から受け取る

新一「神奈川県に茨城県…どうやら殺人現場に印がついてあるみてえだな…」

「群馬に東京…ん?」

灰原「もう一つ丸があるわね…?」

下から透けている地図の裏面を見てそう言った

新一「東京に丸が二つ…!?!」

目暮警部から聞いていた連続殺人は四件だ

現場は神奈川県と茨城県、群馬県に東京都だった

新一は地図を更に覗き込む

新一「……………」

地図を見て黙り込む新一の顔は真っ青になった

服部「工藤…?」

博士「何か分かったのかね?」

灰原「……………」

新一「…一つだけまだ連続殺人事件が起きていない場所に丸がついてる…」

服部「なんやて…!?!」

「まだ人殺す気いか!?!」

「ほんなら次はそこか!?!」

新一「…その可能性は高い…」

元太「じゃあ、早く行って止めねえと!?!!」

蘭「新一、どこのなの？それ…？」

…

新一「…東京都…」

「…米花町…」

服部（まさか…！？）

蘭（…！？）

灰原

新一「毛利探偵事務所…！！」

胸から込み上げる怒りを押さえることができず新一は最後の一言に
力が入った

本当の標的(ターゲット)

光彦「まさか…蘭さん…!?!」
皆の顔も青くなっていた

蘭「新一…?」

新一「…くそっ!!」
ダンッ!!!

悔しみ机を叩く

灰原「工藤君、あなたって可能性もあるわね?」

博士「なんだって!?!でも…丸印は毛利探偵事務所なんじゃろ…?」

新一「いや、恐らく俺が狙いだ」

灰原(…!?!?)

蘭「えっ!?!」

新一「これは俺への恨みの犯行だ、最後に本当のターゲットを狙わないといけないからな」

服部「工藤…?」

和葉「どうゆうことなん!?!」

自分を後に回してまで他人を助ける新一

彼がそうゆう人物だということを服部と灰原は良く知っている

今日の前にいる新一の顔は今までにないくらい怒りに満ちている

大袈裟に言えば今まで自分に迫る危険などどうでもいいと思ってた彼…

過去に同じような状況に陥った時に果たしてこんな表情を見せた事があつただろうか…

だが次の一言に二人は納得した

新一「その可能性がないとは言いつれないがあくまでも蘭は俺への嫌がらせとしての材料として使われた…」

「本当の標的は俺なわけで…」

服部「おい工藤！？まさか…！？」

新一「ああ、毛利探偵事務所に丸がついているということは奴は何かしらで俺が江戸川コナンだったことを知っているということになる…」

灰原(…！？)

新一の左側にあるロッカーに並べてあるものを睨む灰原

愛する者の絆

新一「つまり…俺のせいで蘭が危険な目にさらされちまつかもしんねえって事だよ…」

灰原「…」

服部「…」

歩美「そんな悪い奴、歩美達が倒してやる!!」

元太「おう！新一を守れんのは俺達だもんな？」

光彦「ええ、そうですね！では早速拳銃持ち出しの許可を頂きましょう！」

すると一同は毛利探偵事務所へと向かった

その間新一は今日小五郎は出かけると言っていたがもしかしたら探偵事務所にいるかもしれないと蘭から聞き探偵事務所に入れたが留守のようで電話は取られなかった

探偵団の三人は拳銃持ち出しの許可をと歩美の父親に頼んだが日本の、それも人がたくさん通る場所と時間帯からいくらかCIAの一員といっても三人を諜報員に迎えたことは日本警察も親ですら知らないこと…いや、知られてはいけないこと
そのため許可を得ることはできなかった

光彦「僕達は僕達で頑張りましょう！」

歩美「拳銃なんかなくても少年探偵団の絆があれば誰だって助けら

れるよね？」

元太「そうだぜ！新一安心しろよな？」

歩美「蘭お姉さんも大丈夫だよ？」

そんな三人の言葉に新一と蘭は微笑む

最早ここまで来ると灰原も三人に忠告をすることが出来なかった…
いや、今の三人には忠告など必要ないといった表情をしていた

降り立つ悪人

その頃

米花駅前のバス亭には屋田誠人が乗車するバスが止まり屋田はバスから降りた

そのバスに乗ろうとした一組の若いカップルが屋田とすれ違う

カップル女性「ねえ、工藤新一じゃない!？」

カップル男性「おお、本当だ!」

この近辺に屋田誠人が現れればこうなるのは当たり前だ

屋田「どうも、こんにちわ!」

だが屋田は最早工藤新一に成りきっていた

屋田（工藤新一…フツバカめ…）

怪しげな顔をしながら屋田は米花町三丁目へと足を踏み入れた

毛利探偵事務所

小五郎「蘭ちゅわ〜んただいま〜」

こんな真っ昼間からどこで飲んできたのか分からないがかなり酔っ払っている小五郎が帰宅した

小五郎「なんだー?蘭ちゅわんいないのかー?」

すると小五郎は探偵事務所の電話機から誰かに電話をかけ始めた

ピッポッパッ プルルルップルルルッ

電話を取る相手は何処かで聞いたことのあるような声だった

『はい！目暮！！』

小五郎「警部！ただいま帰りました！！」

目暮「その声は毛利君かね？」

小五郎「はい私、眠りの小五郎でございます！！」

目暮「なんだね…？酔っ払ってるのか…？」

小五郎「警部！！蘭ちゅわんがないんです！！」

と悲しそうな声で言う

目暮「なに！？蘭君がいないだと！？」

このタイミングから勿論驚く目暮

迷惑な迷探偵

小五郎「はい…新一の奴とどっかに出掛けたみたいでいないんです
くっえーん！」

目暮「……………」

その言葉に呆れる目暮

目暮「毛利君…切るぞ…？」

小五郎が酔っ払っていることと蘭がただたんに遊びに出掛けている
こと、その付き人が新一だと言うことを聞いた目暮は受話器を睨み
ながらそう言った

目暮（全く…、こんなだから英理さんに逃げられるんじゃない…）

ガチャツ… ツーツーツツ…

小五郎「ん！？ちよつと！？警部殿〜！？」

新一達はようやく奥穂市を抜けた
すると新一の携帯が鳴った

着信画面には目暮警部と出ていた

新一「はい、工藤です！」

目暮「ああ新一君かね？実はな…」今さっき小五郎から酔っ払った
電話があり大丈夫だとは思ったが今はこうゆう状況下から少し心配

になり蘭が無事かどうかの確認の電話をしてきたみたいだ

おっちゃん・・・

新一

流石の新一も呆れていた

新一「大丈夫です、心配いりません！博士達もいますので」

目暮「そうか、ならよかった！すまん・・・」

新一「いえ、わざわざありがとうございました」

電話が終わりに後部座席に座る蘭が新一に訪ねた

蘭「今の電話もしかして目暮警部？」

新一「ああ」

蘭「もしかして…探偵事務所で何かあったの!？」

心配になる

新一「ああ…」

新一は半目で苦笑いしながら今の電話の内容を話した

最悪の事態

服部「なんやねん！心配させおつて…」

和葉「蘭ちゃんのおっちゃんらしいな？」

蘭も安心したのか笑っていた

だが新一がふと気付いた

新一「ん？待てよ…」

博士「どうしたんじゃ？」

新一（！？）

「やべえぞ…！？」

突如顔色の変わる新一は再び携帯を取り出した

光彦「どうしたんですか？いきなり…」

蘭「新一…？」

新一「おっちゃんから電話が来てすぐ俺にかけ直してくれた目暮警部はおっちゃんは蘭がいねえって言ってたって言った…」

「少なくとも今日蘭が出掛けてから探偵事務所に足を踏み入れてる…」

「いや…この様子だと多分おっちゃんは今探偵事務所にいる…」

灰原「もし屋田誠人の目的地が本当に毛利探偵事務所なら出くわしてしまおうね…」

蘭「そつ…そんな！？」

新一「おっちゃんに危害が加わる確率はゼロに近いが…もし、屋田誠人の妙な行動に気を止めおっちゃんが近寄りでもしたら…」

「つ…くそつ！電話が繋がらねえ…！」

新一はこの事を小五郎に話そうと探偵事務所に電話をかけていたがなぜか話し中になっており繋がらなかった

灰原「携帯は？」

蘭「お父さん昨日お母さんと喧嘩して携帯壁に投げたら壊れちゃったみたい……」

その事を数時間前に聞いていた新一の頭には最悪の事態が浮かんでいた

最悪の事態（後書き）

新一（くそっ……！！）

（おっちゃん……）

博士はビートルを飛ばし始めた

その後を服部と和葉もついて行く

神出鬼没な噂の彼（前書き）

…
快斗「おめえなんか最近悩みがあんだろ？」

新一「あん？別になんもねえよ？」

快斗「泥棒は人の心が読めるんです、誤魔化しても無駄ですよ？」

新一「だから別になんもねえつつうの…」「だいたいおめえ今はもう違えだろ？」

快斗（こいつ自分で気付いてねえな…）

「まあしょうがねえ！来週の日曜おめえんとこ行ってやつから愚痴でもなんでも良いから話せよ？聞いてやるぜ？」

だーからー…
新一

「まあいいや！日曜なんも予定ねえし暇だから待っててやるよ」

「それより前日の土曜おめえ来てくれんだろ？」

快斗「ああ、最高の結婚式にしてやるぜ？」

新一「ありがとな！じゃあまた…」

…

五日前に電話でそう話す快斗と新一がいた

神出鬼没な噂の彼

フッフッ…
屋田

(今に見てるよ？工藤新一…)

米花町内を歩く屋田の目の先には手の中に包まれた小さな袋があった

路地裏に入った屋田はその袋を開け中から一つの小瓶を取り出した

小瓶の中には奇妙な紫色の液体が入っていた

屋田「工藤新一…死す…」

そう呟くと不気味な笑みで路地裏を抜けた

その屋田の目の前には…

屋田「毛利探偵事務所…フッフ？」

探偵事務所内は妙に物静かだった

小五郎「ぐがあゝぐがあゝ」

一つの鳴き声を除いては

案の定小五郎は警部と電話をしたあと直ぐに眠りについた

なんせ眠りの小五郎だ

酔っ払っていたために切った筈の電話の受話器は少しずれていた

コツコツコツ…

事務所の外から歩く音がした
コツツ

玄関の前でその音は止まった

ガチャツ…

玄関のドアが開く

小五郎「ぐがあ〜ぐがあ〜」

相変わらず起きる気配はなかった

バタンツ…

玄関の扉が完全に閉まる

探偵事務所内に人が一人増えた

コツコツ…コツコツ…ツ

その人物は歩きながら辺りを見回す

「あんだよ〜いねえのか？」

探偵事務所を尋ねそこにいた人物とは

工藤新一…いや、屋田誠人…でもない

「ったくよ！自宅にもいないし発明家のじいさんの家にもいないし
よお〜どこ行っちまってんだ名探偵？」

そう、黒羽快斗だった

もう一人の訪問者

快斗「まさか忘れてんじゃねえよなあ？」

快斗はソファーに座りとりあえず小五郎が起きるのを待った
携帯を取り出し新一に連絡してみるがさきほどと変わらず留守電に
なってしまった

快斗「まあいいか！その内帰ってくんだろ？なんてったってここは
愛する嫁の自宅、一日一回はここに足を踏み入れることくらいこ
の黒羽快斗にはお見通しよお！」

蘭が嫁に行くことは嬉しいことだが一人娘とあつて寂しくも感じる
小五郎と英理は結婚式が終わってから毛利家を出ていくという条件
をつけていた

新一と快斗が親戚だということを知ってから妙に仲良くなった二人、
快斗は新一の諸事情を全て本人から聞いていた

その時…

探偵事務所の外から階段を上がる足音が聞こえた

快斗（お？やっとなれたか？）

快斗は新一だったら脅かしてやろうと思いつつ一旦トイレに隠れた

快斗（クククツ、俺との約束をほったらかした罰だぜ？名探偵の間
抜け面しっかり拝ませてもらうぜ？）

悪戯気な笑みを漏らしトイレの扉をギリギリまで閉めた

コツコツ…

探偵事務所の扉が開き
誰かが入ってきた

不審な名探偵

快斗はこっそりと外の様子を覗く

快斗（おっ！ビンゴ）

探偵事務所に入ってきたのは新一にそっくりな屋田誠人だ
その顔は整形しているのだから自然と瓜二つな快斗よりも新一に似
ている

遠目から見た快斗が間違えるのは当然だ

屋田誠人は辺りを見回す

小五郎の方へ歩み寄り寝ている小五郎の体を揺らす
だが当然小五郎は起きない

快斗は偽新一が目の前に来たときに突如飛び出して驚かそうと思っ
ていたが何処か不審な偽新一の様子を見てそれを躊躇していた

快斗（あいつ何してんだ？）

その時ふと嫌な予感が胸をざわつかせた

昨日皆と共に目暮警部から聞いた妙な事件の事だった

すると屋田は小五郎から少し離れた所に止まる

何かを考えている様子で快斗の位置からもその姿は確認できた

屋田は数分その場に立ち尽くした後何かを決めたようにカバンを開
ける

そのカバンから出されたものを見て快斗は確信した

快斗（あいつ寝ぼけてんか？）

（ん…？ …！？）

（拳銃…！？）

屋田は拳銃を数メートル離れた小五郎に向けていた

快斗（あれは…工藤新一じゃねえ…）

すると快斗はトイレの扉を完全に開けた

怪盗と殺人鬼

屋田は開いたトイレの扉に反応しそちらを見た

屋田「工藤…新一」

留守と思っていたので正直驚いていた

だがすぐに不適な笑みでこう言った

屋田「丁度いい…」

快斗（こいつ俺が名探偵だと勘違いしてやがる…俺も都合がいいぜ）

快斗は一瞬の隙を見てできる限りで更に容姿を新一に似せた

そして今までに二回しか話したことのない屋田もまた目の前にいる人物が工藤新一ではないということに気づかなかった

快斗「なんの用だ？」

屋田「お前を復讐しに来た」

単刀直入に言う屋田は拳銃を小五郎に構えるのをやめ快斗の方に歩み寄った

快斗「俺に恨みがあんなら直接俺んどこに来い」

「おっちゃんに手出すんじゃないやねえよ」

（ってあいつなら言うよな…？）

屋田「お前を恨んでるんだ！お前を苦しめるようなことをしなくて復讐が務まるとでも？フフフツツ」

「まずはこの迷探偵から、次は…」

屋田は机の上に飾ってある蘭の写真を見て奇妙な笑みを浮かべる

快斗「……」

(おい名探偵……、状況はかなりやべえぞ……？こいつ、異常だぜ……)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8851x/>

名探偵の終着路 ~重なったanother~

2011年10月28日11時06分発行